へ13
3223
58

特
へ13
3223
58

花御所九重日記

鶴亭作　第初編

國輝画

上巻

花御所九重日記初編序

石川や濱の真砂は竭る共。こゝの五右エ門が辞世の残る一歌。真鶴は不去やちゝ浪の。伊賀の山越忍び出。雲井の海ふ立、初て呉竹の伏見は鳴ー小夜衣。彼豊公の威も終る。一世の事跡。加ふるに花の御所ある花の宴七重に開き八重に咲く。九重日記の四季恋雑。神祇釋教余さなき洩さゞ。書しを是を櫻木に。彫ゞ白ひも香も薄き紙厚き惠み男の看官幾重なる御評判の程一重に願奉る

慶應二丙寅

鶴亭秀賀記

○三太夫の妾
弐部

○三太夫が妾腹の
一子三之助

○三太夫ガ
渾家
婦人
婦人
浅香

○伊賀國の
軍學武術の師範
百地三太夫安時
石川五右エ門の
師匠

○六韜三畧

○江家次第

伊賀國石川村の郷士石川五郎太夫
石川文吾と
名乗る后は
盗賊の張本
勘幼名五郎吉

石川五
右エ門
時行
天下の
横行を是あり

廿三代孝昭太夫
時賢

五郎
百地三太夫

二
滝

五百

百

百
五郎吉

五郎吉

兵書
經書

金華七変化 十七編より 鶴亭秀賀著作 廿五編迄 梅蝶楼國貞画

右八殊の外御評判宜しく作者画工一世一代の新案新工夫をこらしたる駢摺おもしろ念を入れ古今の美本と做しつべき看官競て高覧をねがふ云

水鏡山鳥奇談 四編 秀賀作 五編 國周画

蓬莱嶋臺延寿盃 三編 魯文作 四編 國綱画

偐儡師

花の御所九重日記 初編より秀賀作 追々出版 國貞画

文 地本雙紙問屋 金松堂 横山町三丁目 辻岡屋文助梓

日本橋通十軒店 繪双紙 武蔵屋勝之助

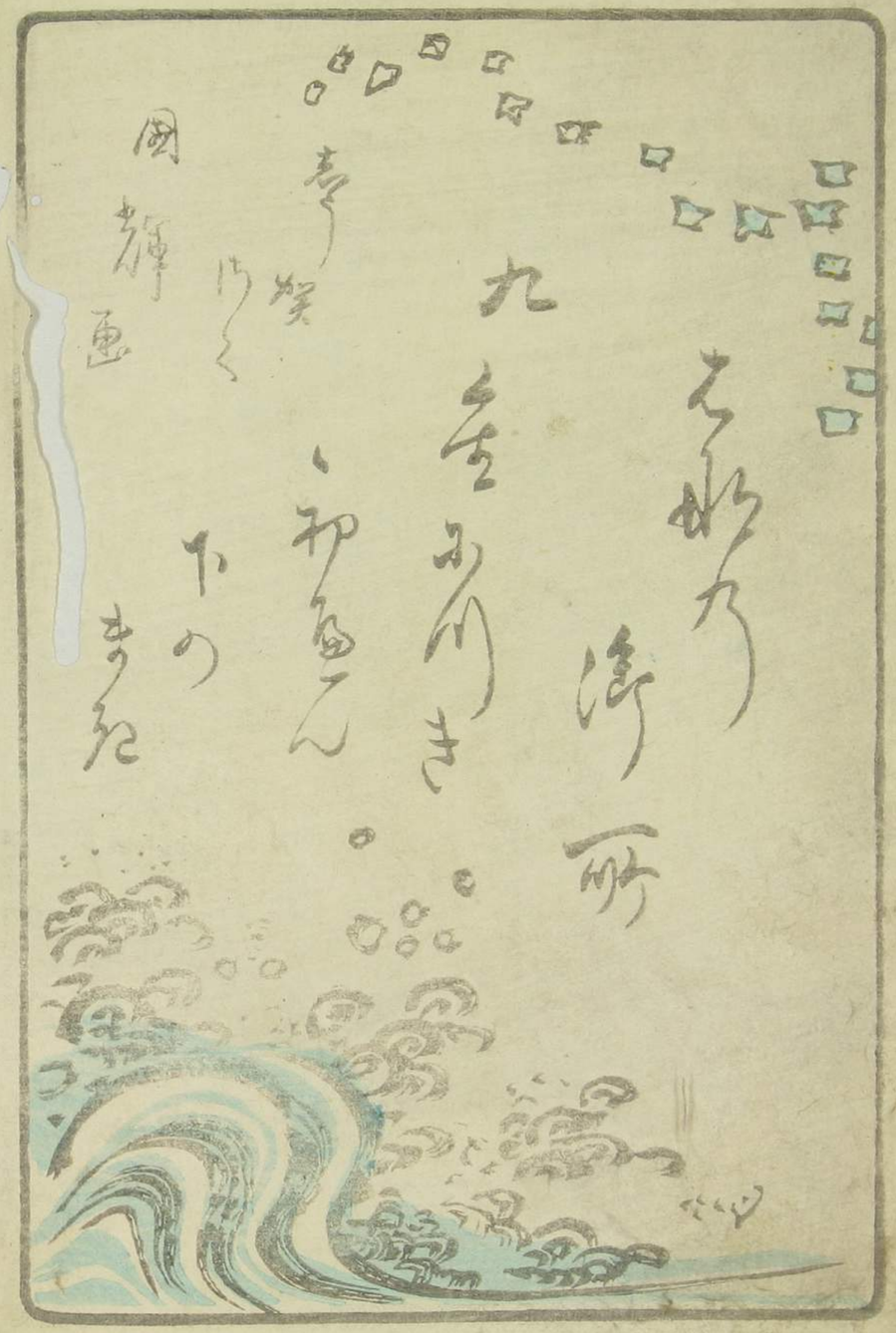
御丁寧の油 和漢 ゆうづくしき業 の丁寧 丹精 御 御 稽 ゆ 一 武 様 中 方 肝要の 品 物 に 対 て 新 の 対 て 品 く 物 の 品 を 出 れ 要 く 本 稽 す 上 方

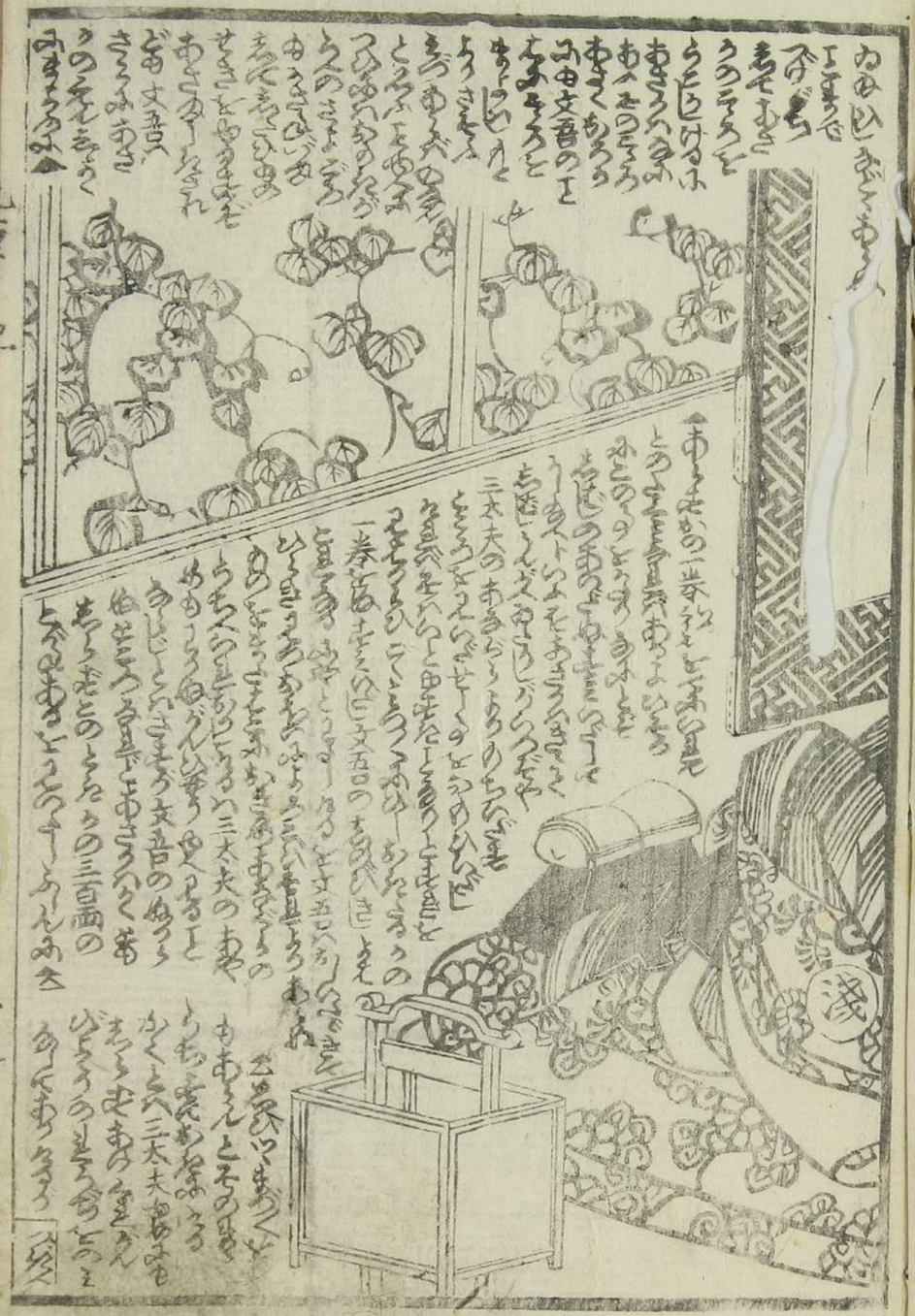
初編

一雄齊國輝画

下

三
百

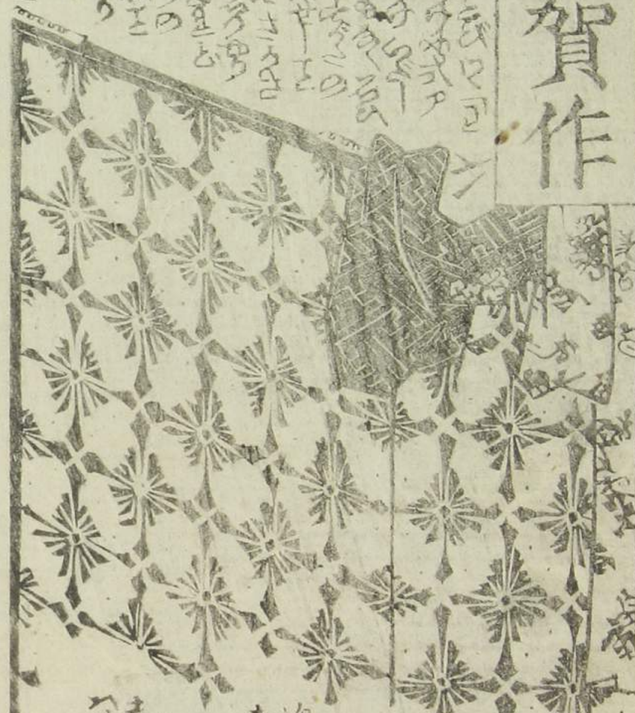




三
式

浅
忍
天
日智婦才
鹿古多屋

鶴亭秀賀作



改國綱

春蝶樓國輝画

慶應二歳丙寅初春開版目錄

武田膏月　大貝百丸

江戸八丁堀町三丁目
飯島屋三郎謹製

小貝二十錢
中貝四十八錢

神仙一角丸

氣の毒迄小兒五疳諸病ホヒ

調合所　上總國東金町　大野傳兵衛

文

地本双紙　問屋　金松堂

横山町三丁目　辻岡屋文助梓

周防染櫻模様　四編　貞雅作　五編　國貞画

梅春霞引始　三編　魯文作　讀切　國周画

濡衣女鳴神　十編　秀賀作　讀切　國貞画

假枕異八景　二編　魯文作　讀切　國周画

道外江戸名所　大錦繪　五十枚　廣景画　續

花御所

上巻

鶴亭秀賀作

文壽梓

花市所

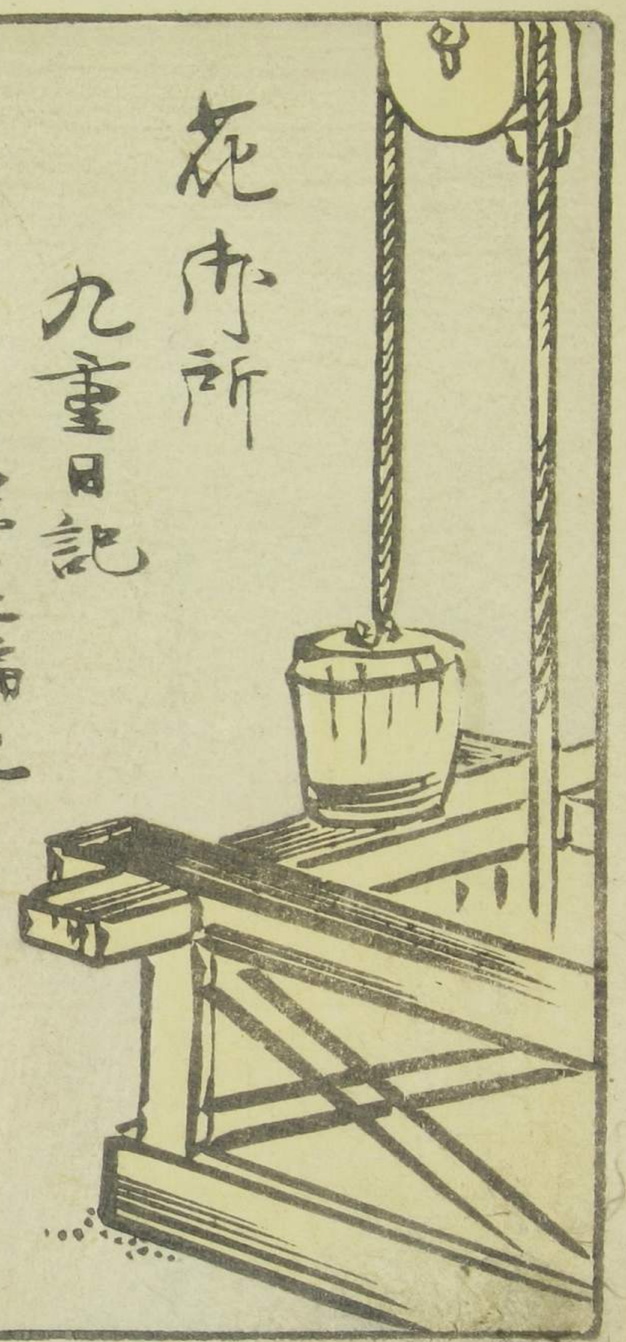
九重日記

第二編上

春霞楼主人作

くにてる画

金松堂蔵版



石川文吾時行

五右衛門則是

秀賀頭ハ石ゐ非ずと。枕を割て趣向を案ず。画工の腹鐵ゐ非ず共心を碎て畫圖を写して以て作る。物語も石鐵の硬き計りの利屈ハ不流行。ゑ共通情月雪や。花々敷譚而已でも實ゞあのと。堅ゝと燃ゑきを淫交て。彼ゝくの石川ゞ

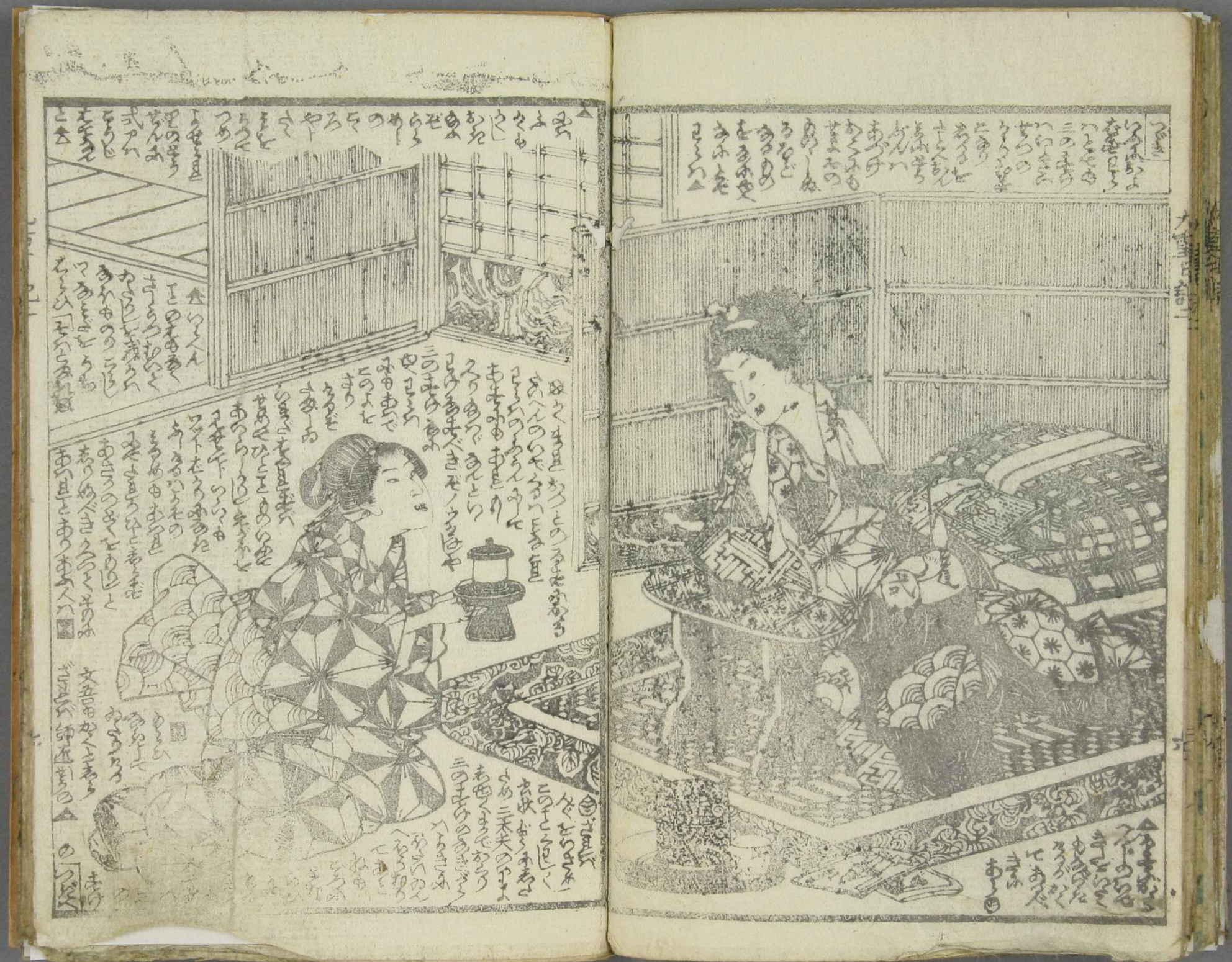
慶應元乙丑稿

同二丙寅新史

鶴亭秀賀戦詞

閑子ぐ〜ねど文五吾の行跡百地ゞ渾家の淺々敷淺香の悪行弐部の横及是彼綾り合て漸み第二輯の稿を脱し畢ぬ

眼料弱井半白
實ハ盜賊の
魁首松山
大八
宗行
再出
弐部



秀賀作 國輝画

金華七變化 十七編より世五編迄 鶴亭秀賀著作 梅蝶樓國貞画

右八殊の外御評判宜しく作者画工一世一代の新案新工夫をこらしてふ刷摺ホンに念を入れ古今の美本と做し候間看官競て高覧を願ひ奉る云

水鏡山鳥奇談 四編 秀賀作 五編 國周画

蓬莱嶋臺延壽盃 偐儡師 三編 魯文作 四編 國綱画

花の御所九重日記 初編より秀賀作 追々出版 國貞画

日本橋通十軒店 繪双紙 武藏屋勝之助

本製丁子油

抑丁子の油は和漢ともに珍しき美油にて毒を解し痛を鎮ること効あること神武帝の時より用ひ来りし由なり殊に婦人の髪を整へ美しくする事妙なり

文 地本雙紙問屋 金松堂 横山町三丁目 辻岡屋文助梓

歌川國麿画

九重記

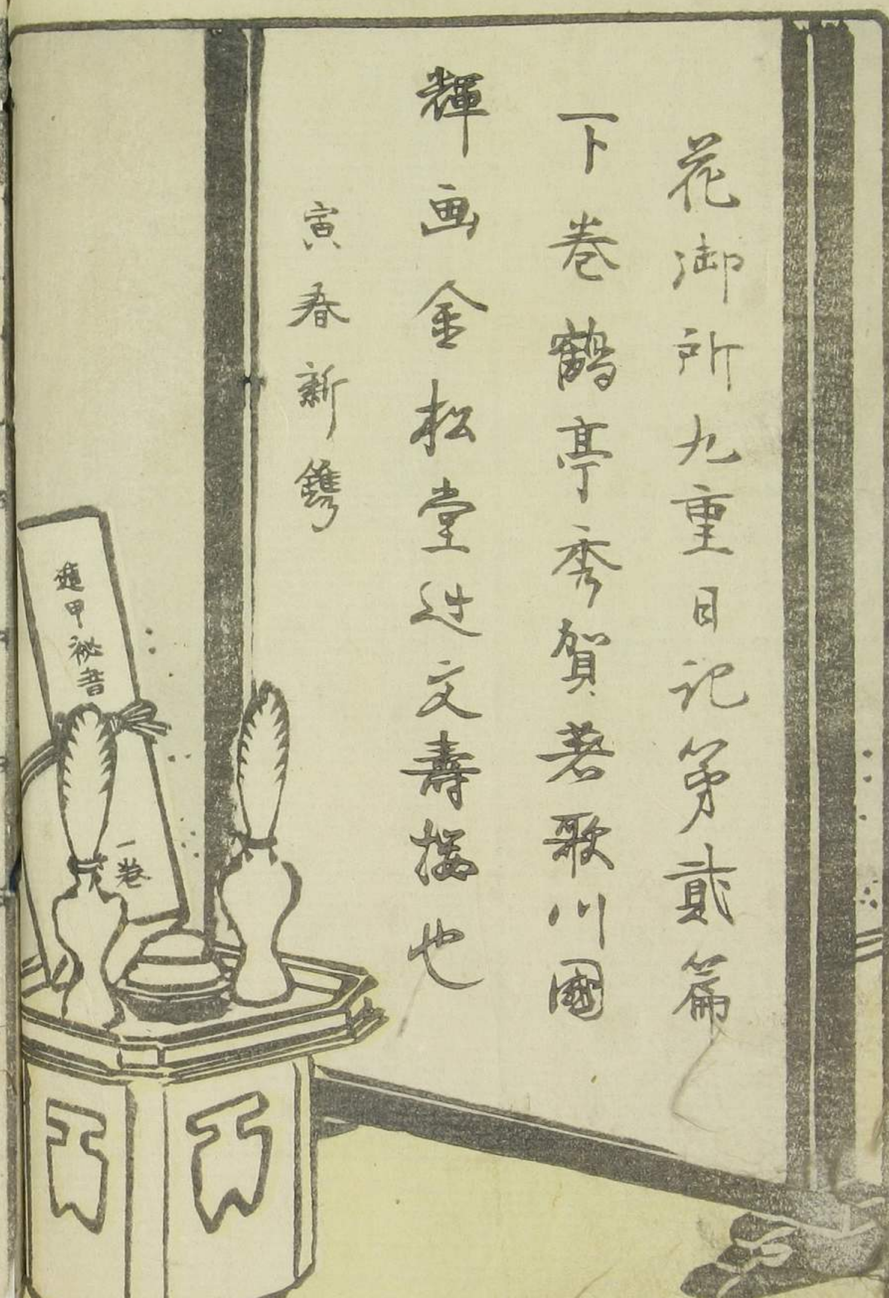
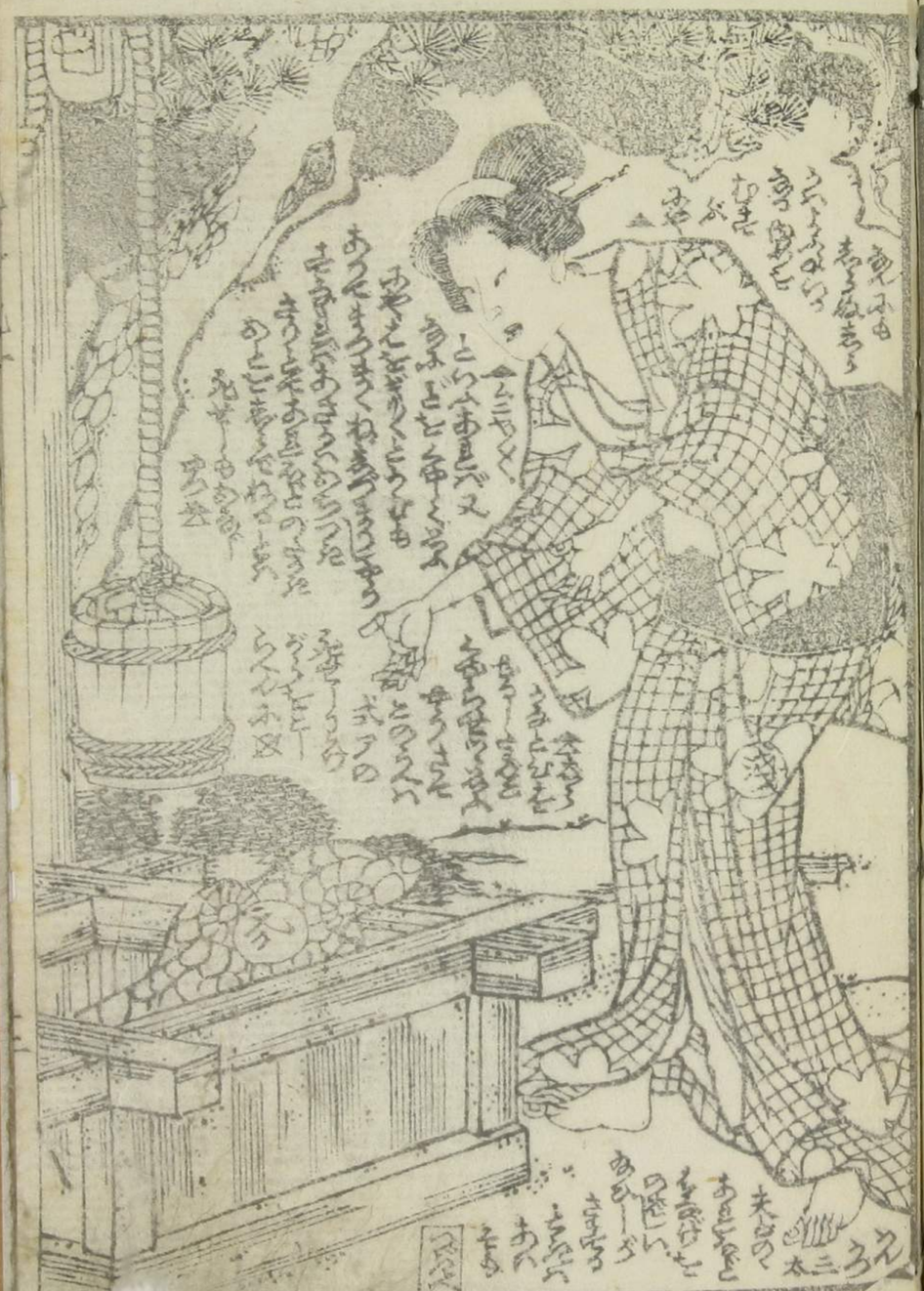
第二輯

丙寅孟春

下巻

花御所九重日記第貳篇

下卷鶴亭秀賀 若歌川國

輝画 金松堂辻文壽梅也

寅春新鐫